国語分科会第３０回議事録

平成１７年　７月　５日（火）
午後２時～午後４時
丸ビル・コンファレンススクエアルーム4

〔出席者〕
（委員）阿刀田分科会長，阿辻，井田，岩淵，大原，甲斐，金武，菊地，小池，坂本，佐藤，陣内，杉戸，林，前田，松岡，松村，山内各委員（計２０名）
（文部科学省・文化庁）河合文化庁長官，加茂川文化庁次長，寺脇文化部長，久保田国語課長，氏原主任国語調査官ほか関係官

〔配布資料〕
１　国語分科会第２９回議事録（案）
２　第２２期国語審議会　現代社会における敬意表現（概要）
３　漢字に関する調査結果について
４　文化審議会国語分科会における検討スケジュール（案）
　付　所属小委員会希望調査票
〔参考配布〕
○　朝日新聞・朝刊（６月２５日）「常用漢字表の再検討」記事切り抜き

〔経過概要〕
１　事務局から，配布資料の確認があった。
２　前回の議事録（案）について確認した。
３　事務局から，配布資料２，３についての説明が行われた。説明に対する質疑応答の後，配布資料を参考として意見交換を行った。
５　事務局から，配布資料４についての説明が行われ，了承された。また，所属小委員会希望調査票に基づいて，小委員会の構成メンバーを決めることとし，最終的な決定は分科会長に一任された。
６　次回の国語分科会（各小委員会）は，各委員の日程を調整した上で，事務局から改めて連絡することとされた。
７　質疑応答及び意見交換における各委員の意見は次のとおりである。

○　阿刀田分科会長
配布資料２の説明の冒頭辺りで，「敬意表現」のことに少し触れたのは，今回の諮問が「敬語」という言葉で出ているわけですが，その食い違いのことをおっしゃったのでしょうか。冒頭に「敬語」と「敬意表現」とをどう考えていったらいいかということをおっしゃったと思うのですが…。

○　氏原主任国語調査官
これまでの２回の議論で，敬語については，どこまでを対象とするのか，どの範囲を取り上げるのかということが大きな話題になっていると思います。前回の懇談会でも，答申の「敬意表現」というのは，かなり広い範囲を対象としていて，そのことはとてもいいことだと思うが，更に広げてノンバーバル（nonverbal）な非言語の部分まで広げていってもいいのではないかというような御意見がありました。一方で，そこまで広げ

てしまうのはどうかというような御意見も出ていました。

この点に関連して，「敬意表現」でこのように広くとらえた理由の一つとして，諮問そのものが「言葉遣いに関すること」というものであったということがあります。最初から広くとらえていくことが期待されていた諮問に基づいて，議論が始まっていたわけです。それに対して，今回出されている諮問は，「敬語に関する具体的な指針の作成について」ということで，「敬語に関する具体的な指針」と限定されています。その辺りが，「敬意表現」の考え方を受け継ぐにしても少し考慮していかなければいけない点ではないか，ということで申し上げたものでございます。

○　阿刀田分科会長

もう一つ，これは阿辻先生に伺った方がよろしいのかなとも思うのですが，実際問題として，ここに例として挙げている「澤」という字だけがやたらに古い字を使っているように思うのです。なぜ，これだけが突出して旧字体を使うようになったのか，学術的な根拠があるのでしょうか。

○　阿辻委員

固有名詞ですので，戸籍との関係があるのではないかと思います。「澤」だけが突出しているのかどうかは分かりませんが…。旧字体と新字体，例えば「國（国）」とか，「学校」の「學（学）」とか，音楽の「樂（楽）」というのは余り固有名詞には出てこない漢字ですので，新旧両字体を持つものの中で，名字に使われるものとしては「澤」が割と可能性が高いのかなというぐらいの理由しか思い付かないですね。

○　阿刀田分科会長

私は職業柄，サインのときに相手の名前を「為（ため）書き」することがあるのですが，そのときに圧倒的に旧字体が多いのが「澤」です。新字体で書くとしかられたりしまして，圧倒的に多いものですから，何か理由があるのかなと思って…。

○　阿辻委員

配布資料３の調査ですけれども，①，②は文化庁が平成16年になさった調査のようですが，被験者数，その選定の方法，もう一つは地域ごとに調査をされるというのは何か意味があるのかということについてお教えいただけますでしょうか。

○　氏原主任国語調査官

①，②に関しましては，表紙に書いてありますように，平成15年度の『国語に関する世論調査』ということで，3,000人を対象に，日本全国の縮図になるように考えられて行われた調査です。ですから，地域もそうですし年齢構成もすべてそうなっています。先ほど見ていただいたところに数字が出てますが，60歳以上が一番多くなっています。

先ほど18ページの「刺繍（しゅう）」というところを見ていただいたのですが，60歳以上を見ていくと，男性の場合は361人，女性の場合は378人で，これは，60歳以上だけ増やしているということではありません。現在の日本の人口を年齢構成比で見るとこういうふうになってしまうということなんですね。特に，16～19歳が少ないのは，ほかのところは20～29歳とか10年刻みですが，16～19歳ということで半分ぐらいしかいないというのがもともとあるわけです。それから，この年代の人口が少ないということもございます。ということで，性・年齢別の人数は，日本人全体の縮図になるようになっています。

それから「地域ブロック別」というのが書いてございます。北海道107とか，四国が一番少なくて78になっています。これも四国だけ意図的に少なくしたわけではなくて，

人口比でやっているということです。先ほど申し上げましたように全部で3,000人なんですが，これを層化２段無作為抽出法で選んでくるわけですけれども，中には，いろいろな理由で調査できない方がいたり，お断りになったりという方もいらっしゃいます。有効回収率が70％を超えるとかなり信頼度が高いということで，毎年73％を超えるようにということで実施しております。このときも3,000人の方にお願いして，2,206人の方に調査を受けていただいたということです。

調査の方法につきましては，調査員が訪問しまして，面接する形でやっております。ですから，アンケート用紙を送り付けて，「書いてください」ということではなくて，実際に，お訪ねして，一対一で「これについてはどうでしょうか。これについてはどうでしょうか」というふうに直接聞いておりますので，かなり信頼できる結果が出ていると考えていいと思います。

○　杉戸委員

今の御説明の中で60歳以上の方が370人とか361人とか，その数字のことなんですが，回答率というか，調査に応じてくださった率が問題になるだろうと思います。つまり，年齢の高い方は答えてくださった率が高いという事実がなかったかどうか。そうでなくても回答率による回答そのものの違いというか，回答率が回答に与える影響，つまり，どんな人が回答してくださったのか，忙しくてこういう調査に応じ切れないとか，あるいは，そういう言葉について考えるのも嫌だ，質問に答えるのも嫌だというような人は答えていないということがあります。細かなことですけれども，先ほどの御説明の背景に，そういうことがあるのではないか。そのことをどういうふうに考えるかということでございます。

○　氏原主任国語調査官

今，杉戸委員がおっしゃったとおりだと思います。60歳以上の方は受けてくださる方が比較的多いと言えます。特に，仕事の関係もあって，社会の中心で働いているような年齢層の方はなかなか受けていただけないということがあります。ただ，回答率にそれほど大きな差はないと思います。

60歳以上に関しては，この枠は60歳以上ということですので，60代，70代，80代……90代まで入っているかどうかは分かりませんけれども……，それが全部，60歳以上ということでまとまっています。もともと高齢者層が人口比としても多くなっていることに加えて，60歳以上というところは，60歳以上であればすべてここの枠に入ってしまうという，二つの理由から，この枠の人数が特に多くなっているという事情があります。

○　佐藤委員

配布資料３の20ページですが，この分科会で話し合われたことが即決定ということになるのか，それとも，アンケートの答えを見て，その方向に持っていくのかというのが前回から気になっていたところです。

配布資料３のＱ１の国語辞典を「あまり使わない」と，「全く使わない」と，「国語辞典はない」，これで52％，半分以上が辞典なんかどうでもいいみたいな人が多いわけです。それでいて，Ｑ５で「常用漢字」をいつも使っていると言う。ということは，頭の中に常用漢字というのは何かというのが，辞書がなくても分かっているという方がこんなにいるということになるのですが，とてもそうとは思えないということです。ですから，こういうアンケートだけで結果を決めてしまうのはおかしいのではないか。

私が思うに，こういうアンケートが来ると，どちらかと言うと格好いい方に○を付けるという傾向はありはしないだろうかと思うんです。だから，こういうふうにしましょ

う，ああいうふうにしましょうというのを，アンケートの数字だけでは決められないのではないかなと思いましたが，いかがでしょうか。

○　氏原主任国語調査官

おっしゃるとおりだと思います。これで決めるということではなくて，今日の漢字に関することについての話題提供ということで用意した配布資料でございます。内容としても，佐藤委員がおっしゃったとおりだと思います。先ほども申し上げましたように，本当にそうなんだろうかというような結果が随所に出ていると思います。

○　阿刀田分科会長

アンケートの結果というのは，よほど慎重に構えて，大体の傾向としてそんなことも言えるのかという程度に押さえておかないといけないものでしょう。それで，金科玉条みたいなことをやっていったらとんでもないことになるだろうと思いますので，十分に警戒しながら今後も進めていきたいと思います。

○　甲斐委員

配布資料３の「表５」の60歳以上というところを，私も60歳以上なものですから，気になって見ておりました。「刺繍」というところに関しては，交ぜ書きと振り仮名付きのパーセントが釣り合っています。しかし，それの前の方を見ていきますと，すぐ前の「玩具」は先ほど説明のあった，新聞で振り仮名なしで使っている漢字39字に入っているということで，14対45となっています。その前の「破綻」は，比較的釣り合っているのですけれども，「剝製」は10％の違いがある。そうすると，釣り合うのか違いがあるのかというのは，同じ60歳以上の場合でも，漢字あるいは言葉にどれだけ慣れ親しんでいるかという親疎に関係があるのではないかと感じられます。60歳以上を見ても，大きな違いがあるわけですから…。

終戦後からの教育のことを思い起こしてみて，そこに理由があるのかと思ったのですけれども，それだけでは説明しにくいんですね。そこで，60年間の国語に対する親近度と言いますか，そこのところでの交ぜ書きと漢字，あるいは振り仮名付きということの問題がありますので，是非とも，こういう表外漢字についての調査が必要だろうと思うわけであります。これから４年ぐらいで結果が出てくるとすると，最初の２年間ぐらいに是非とも調査をお願いしたい。

前回，岩淵委員が「正確な調査が必要だ」とおっしゃったが，私も本当にそう思っております。国立国語研究所が力を挙げて，科学的で正確な，全国調査を展開するような企画を考えていただきたいと思っているところであります。

○　林委員

配布資料３を拝見しますと，人間というのは，言っていることとやっていることが随分違うな，ということを感じます。先ほどの常用漢字に関するアンケートの回答にも，同じ感じを持ちます。

そういう点でこういうデータを解釈いたしますと，例えば①ですけれども，「常用漢字表にない漢字であっても，積極的に使っていくべきである」と，これが一番多いわけですね。これも「常用漢字表」をはっきり意識して，こういう回答をしているかどうか分からない。つまり，その本音を推測しますと，「常用漢字表」はその意義を認めるけれども，必ずしもそういうものにがっちり拘束されたくない，好きなときには常用漢字表にない字でも使ってもいいではないか，それが本音かもしれません。こういうところの解釈は，私どものこれからの審議にも非常に大事な面を持っているのではないか，こ

れが１点です。

それから，②は言葉の書き表し方として見ますと，断然，漢字ルビ付きが人気があるわけです。でも，漢字に対する施策を考えていくときに区別しなければいけないのは，書く場合と，印刷したものを読む場合とは全く話が違うということです。例えば，読む場合だったら「愕然」というのはこういうふうに書いてあった方が分かりやすい。そういうふうに感じることは当然だろうと思います。しかし，書く場合は，手で書く場合もありますし，ワープロのようなもので書く場合もありますが，ワープロのようなものを使ったとしましても自分でルビを付けるのは大変面倒でございますので，書く方になると，機械，手を問わず，ルビは余り使わない。その両面から漢字というものの施策，それから，漢字による表現というものを考えていかなければいけないだろうと思います。それも，またこれからの議論の前提的な論点として大事ではないかということを，この資料を見て感じました。

○　松村委員

こういう調査を見ると，学校での子供の姿や教室の風景に重ねて見てしまうのですけれども，一番最初の③の問１「国語辞典をふだんお使いですか」の中に，電子辞書は入らないものなのでしょうか。「国語辞典を持って来なさい」と言ったときに，電子辞書を持ってきたということもあって，私の学校では，今は，学校には持ってこないということで指導しているのですが，一般の調査だとそういうことはどうなのでしょうか。

もう一つ，「常用漢字以外も積極的に使っていこう」というのが，こんなに数として多いのかということに私はちょっと愕然としました。今，中学校では，中学校３年間を通して，小学校の学年別配当漢字表に示されている1006字は書けるようにし，また常用漢字の大体について読めるようにする。中学校の学習指導要領の枠内で言いますと，そういうふうにして卒業させられればよいということになっています。今後，人名漢字をどういうふうに広げていくかとか，常用漢字の枠を交ぜ書きのことも考えてもっと広げていこうと言ったときには，今の小学校や中学校の国語科の授業時数のままで教えていく必要があるとなったときに，どこまで対応できるのかという心配はあります。

それから，もう一つは感想です。人名漢字で，我が子に名前を付けるときに「漢字の本来の意味で付けたい」というのが20%，第１番に挙げられているという調査結果があるのですが，子供の立場で言うと，具体的な例を申しますと，授業中，子供たちが落ち着かないときなどに，例えば「賢一君」という名前の子がいれば「一番賢いという名前を親からもらって，授業でこんな態度を取っては，親が嘆くね」というようなことを前触れで入れると，信じられないくらい子供の表情が変わるんですね。そういう話をすると，「僕の漢字は，先生，どういう意味？」という質問が出てくるくらい，自分の名前に対する愛着というか，親の思いがどんなふうに自分の名前に入っているのかということに，子供たちはとても関心を持っている。こういった人名漢字をどう考えていくかということは，常用漢字とはまた別に考えても，大事な問題かなと，そんなことを今考えておりました。

○　阿辻委員

今，人名用漢字の話をされましたので…。「漢字の意味を考えて命名する」という御希望はかなりあるみたいなんですが，それにしては表音文字的に漢字を使っている名前も結構多いのではないかという気がいたします。漢字の意味を使わずに，発音だけを組み合わせて，私の知り合いのお嬢さんは「ちえり」さんというのですが，それは，桜の「チェリー」をもじって，「知恵」の「知」と「恵」と，「利益」の「利」かな，家の中では「チェリー」と呼んでいるということですが，その「知恵利」さんにおいては，

「知」とか「恵」とか「利」という意味はほとんど考慮されていない。言わば万葉仮名的に表音文字として使っている名前で，これは結構あるのではないかという気がしますので，今日このアンケートを見て私には意外な感じがありました。

それとは別の話ですが，配布資料３の最初のページの，常用漢字以外の使用に関する調査で，ＡとＢという二つの項目がありまして，Ａは「常用漢字表にない漢字であっても積極的に使っていくべきである」，Ｂは「表外字を使うことは望ましくない」，この中間的な立場というのはかなりあるのではないかという気がするのです。「Ａですか，Ｂですか」と聞かれたら非常に難しい返答になるのではないかと思うので，私個人は，このデータをどのように読み取るべきかというのはちょっとまだ見えてこないところがあります。常用漢字だけでは足らないけれども，何が何でも使っても構わないというふうには思わないという方も結構おられる。つまり，Ａダッシュみたいな方も，あるいはＢダッシュみたいな方もいらっしゃるのではないかと思うのですね。

これからそういう調査みたいな作業があるのだったら，表外字といっても，どの段階での表外字なのか。例えば，『大漢和辞典』に入っているものは無条件で使えるとか，ＪＩＳの6350種類の漢字はコンピュータで書けるのだから自由に使えとかいうふうに，網の掛け方をもう少しきめ細かく考えていかないと，社会の実態は見えてこないのではないかという気がいたします。

○　杉戸委員

今の阿辻委員の御意見に私も賛成なのですが，そういった調査をするときの注意点として，今日，説明のあった資料を拝見して思ったことを一つ申し上げます。「常用漢字表」の本文の前書きのところに，「常用漢字表は法令，公用文書，新聞，雑誌，放送など一般の社会生活において」うんぬんと，書き表す場合の目安を示すものだということが書いてあるわけです。

例えば，漢字の方の配布資料３の①の問３ですが，その質問文の最初のところには，「新聞や放送など，一般の社会生活における漢字使用の目安…」と，「常用漢字表」の前文の精神が書いてある。ところが，回答する場合の選択肢の方で，回答者がどういう場面を想像して回答してくださったのかがちょっと心配になるんですね。というのは，回答者3,000人が選ばれて，2,206人が回答しているわけですが，その方たちは「常用漢字表」の前文にある，一般の目に触れる新聞とか放送の文章を書く側に回っている人は少なく，多くは読む側に立っている。そういう人たちがどういう気持ちで回答しているのかということを思うわけです。ＡとかＢというのは読む立場に立って積極的に使われた方がいいなという人がＡであり，Ｂは読めないのでは困るから使わない方がいいと，そういう意見だと読むべき回答者が多い，そういう回答であろうと思うのです。

そのことを先ほど甲斐委員が，国立国語研究所はきちんとした調査をすべきであるということを言われましたが，したいと思います。１回目にも申しましたが，しなければいけないと思います。そう言ったときに，今のようなこと，常用漢字を見直すとして，前文に書いてある精神ですね，どういう範囲を覆う漢字表であるのかということについても議論が必要であるかどうか，私はあると思うのですけれども，調査とか議論の材料をここで資料として提出する場合はいつも気にしていたいと思います。

それに関連して，これはＮＨＫの調査結果が③のデータとして紹介されていまして，その中で「常用漢字表」に関する質問，Ｑ８ですね，それから，人名用漢字の方にもＱ13がありまして，それぞれの選択肢の（ア）の中に「漢字の正しい使い方を決めるのは国として」うんぬんとあります。Ｑ８で，「国が『常用漢字』を定めることについて」という質問の選択肢の中で「漢字の正しい使い方を決める」，これは「常用漢字」の精神というか目標というか，そこを「正しい」という修飾語を使って表している点が問題

だと思うのですけれども，別の考え方をさせて回答させてしまってはいないかと，そんなふうに思うのですね。ＮＨＫの方は，放送の画面での文字の使い方ということを集中して調査されているはずですから，それは，別の意図があったと想像するわけですが，「常用漢字」そのものについて，今後調査したり，調査結果を見る場合は，そこの注意が必要だと思いました。

○　阿刀田分科会長
例えば，「漢字の正しい使い方」とは何を指しているのか，そういうことですか。

○　杉戸委員
そういうことだと思います。偏・旁（ぼう）・筆画ですね，それの一つの目安を示しているとか，読みの範囲という意味の正しさを示しているとか，そういった日常的に言う正しさとは違ったというか，もうちょっと幅の広い意味の正しさを示していると解釈し直さないと，この選択肢で使われている「正しい」というのはまずいのではないか。
常用漢字表のときに「目安」という言葉が随分議論されたと伺っていますけれども，そこのところをもう一度確かめ直しながら，議論は進むべきだと，今，指摘した二つのアンケートの項目を見て思ったわけです。

○　阿刀田分科会長
普通の方は「漢字の正しい使い方」と言われたら，「常用漢字表」のことをまず頭に浮かべてしまうのではないでしょうか，そうでもないのでしょうか。よく分からないのですが，確かにおっしゃられてみて，「漢字の正しい使い方」というのは本格的に正しい意味を問われたら，随分難しいことまで出てきそうな気がするのですけれども，一般の方はそこまではお考えにならないだろうなと思いますね。

○　金武委員
今おっしゃったように，調査をする場合にどういう答えが出てくるかということで，それがはっきり一つだけ分かるような傾向の調査を心掛けていただきたいと思います。というのは，例えば，②問４では言葉の書き方を聞いているわけですから，「愕然」というのが，漢字で「愕然」でルビが振ってあるという使い方が出てくるのは結構なんですが，この場合，答えた人は「愕然」の字を知っていて，答えたかどうかは分からないわけですね。つまり，この選択肢の中で何かを選ぶということです。ですから，こういう調査は調査で必要なんだけれども，これから「常用漢字」の裏付けとなるような調査をする場合には，単独の漢字が読めるか，読めないか，それから，どういう意味かということを単純に理解しているかどうかが分かるような調査が必要だと思います。
それから，ちょっと感想です。「剝製」「破綻」「刺繍」「玩具」の中で，交ぜ書きの方がいいという考え方が，60歳以上で多かったのは少し意外な感じがしたのですが，よく眺めて見ますと，「自分が書き表す場合」という質問になっておりますので，60歳以上の人ですと，ワープロソフトを余り使っていないだろうから，手書きをするのに，「刺繍」の「繍」なんていうのは書くのが大変であると思うのです。そういうことで，これは交ぜ書きでもいいだろうとなったのではないか。若い人たちはワープロソフトで何でも出てくるので，漢字書きの方が良いと考えているのでしょう。だから，この書き表し方というのが，先ほども出ましたが，手書きを意識したのかどうかというのは分かりにくいと思います。実際「刺繍」の「繍」は60歳以上で交ぜ書き支持が高かったけれども，それより画数の少ない「玩具」とか「破綻」とか「剝製」はそれほどでもない。そういうところで，「刺繍」がたまたま交ぜ書き支持になったのではないかという気が

します。

それから，これは単なる感想ですけれども，阿刀田会長が最初におっしゃった「さわださん」とか「ふくざわさん」の「さわ」が旧字体の使用が多いことに関連して，かねがね思っているのは，「福沢諭吉」の「福沢」は教科書では新字体を使っております。それが今の国語表記の標準ですが，現在いらっしゃる「ふくざわ」さんの中には旧字の「澤」を主張される方が多い。福沢諭吉も昔は「ふく」も「さわ」も旧字だったと思います。「さわ」だけでなく，「ふく」も偏が「ネ」でなく「示」の旧字体だったはずです。ところが，現在いらっしゃる「ふくざわ」さんで，私の知っている限り，「福」の方を旧字にしてくれと要望したり，あるいは，そういうふうに表記したりする例は余り知らないんですね。「さわ」だけを旧字体にしている。渋沢竜彦さんの「ひこ」もそうです。「さわ」「たつ」は旧字体を使うけれども，「ひこ」は旧字体を使わなくても余り抵抗がないのか，使ってない例をよく見ます。ということを考えますと，今のワープロに組み込まれているので「澤」はパッと転換するけれども，「福」の方はなかなか転換しませんね。旧字体の使用に一貫性がないのは，そういう単純な理由ではないかという気もしております。

○　菊地委員

私は敬語の方で呼ばれているのだろうと思いますが，漢字についても多少感じているところがありますので，ちょっと感想を述べさせていただこうかと思いました。

漢字に限らず言葉というものは，「みんなのもの」と「一人のもの」，あるいは「よりどころ」と「自由度」という両面を持っているわけですが，特に，漢字はこれ以外にいろいろなファクターを合わせて考えなければならないところがあって，ある意味で敬語以上に大変なテーマだと思います。ほかに考えなければならないことは幾つもあるのでしょうが，私なりに気付いたことが三つぐらいあります。

一つは，学習負担と社会全体としての漢字力の維持の兼ね合いの問題です。学習負担については，先ほど松村先生のおっしゃったようなことがあるわけですね。一方で，社会全体としての漢字力がどのぐらい落ちてきているのかという統計などはあるのかどうかも分かりませんけれども，先ほど来の③の「あなたは常用漢字の範囲でちゃんと書いていらっしゃいますか」という質問に37％の人が「いつもそうしている」と答えているのは，おかしいじゃないかという御指摘もありましたが，考えようによっては「自分は常用漢字以外の字はほとんど知らない，だから結果として守っているに違いない」という固い信念を持っている人が相当いるのではないか。逆に言うと，そこまで漢字力が落ちてきているのではないかという気もするのです。

２番目として，今の子供たちは子供のころからワープロになじんでいるワープロ世代なわけですね。これは私たちの世代とは全く違う漢字との出会い方を子供のころからしているわけで，その子供たちの身になって考えるということが，ある意味ではほぼ不可能ではないかと思うほど，違う体験をしていると思います。今の子供あるいはもう少し上の世代に，一体，漢字力としてどの程度のものを求めていくのか。これは本当に難しい問題だと感じます。漢字がそもそもどのぐらい必要なのかというと，いろいろな識者がおっしゃるとおり，明治以来我々は漢字を学んで，それによって造語力を高めていろいろな知的活動をしてきたわけです。きっとこれからもそういう面は保っていかなければいけないだろうけれども，ワープロで育った子供たちにどこまで求めていけるのか，本当に難しいテーマだという気がします。

そして，もう一つ，私は日本語を母語としない人，概略的に言えば外国人に対する日本語教育も仕事にしておりますが，漢字は私たちのものであるだけではなく，子供たちのものでもあって，しかも外国人のものでもあるということにも目を向けなければなら

ない。これは，今までどなたも御発言がなかったので，この点を申し上げたかったという思いが強いのですが，そういうことも考えながら漢字小委員会の先生方には設計していただければと思います。

一つの方向性として，前回，何人かの先生方が「どんどん増やしていけばいいというものではなくて，見直しが必要だ」ということをおっしゃっていらっしゃいましたが，私もそうだなと思って聞いておりました。これまでの漢字に関する施策を見てみますと当用漢字があり，随分要らない漢字もあるなと思いつつ，減らすことは罰が当たるような気がして，増やすことだけをしてきて，常用漢字は結局増えてしまった。あの時，随分減らしてほしい字があったのですが，先人のしたことに失礼はならんという思いが，二，三十年前の審議会の先生方にはおありになった。しかし，それをまたやると大変なことになっていくであろうと思います。外国人の場合には，読める漢字，書ける漢字という区別をして学習していくのがむしろ普通でして，ワープロ世代に求めていく場合にも，そのように，ある程度のグレードを付けていくということも，この委員会で直ちにということにはならないかもしれませんが，将来的には見据えていかなければならないだろうと感じています。ただ，折しも文科省の方がいらっしゃるのに恐縮ですが，「ゆとりの教育」の失敗ということが言われて，学力低下ということが言われている中で，漢字の数を減らすということを言い出すと，いろいろなバッシングがあるかとも思いますけれども，これは「ゆとりの教育」に伴う学力問題とは全然別のものでして，ほかの学習の学力を高めるためにも，漢字学習の負担の軽減ということを本気で考えなければいけないのではないか，そういう方向を見据えてやらなければいけないのではないかと感じております。

○　阿刀田分科会長

つい先週行われた初等中等教育分科会においては，「ゆとりの教育」は全然失敗していない，これからいい結果が出るんだというのが大方の委員，恐らく80％を超えているのではないかというような感じでして，世の中で言われていることと少し違うかなという感慨で聞いておりました。この辺りのことは，最終的に初等中等教育分科会が出すかどうか，分かりませんけれども，たまたま先週はそんなことが出ておりました。

○　甲斐委員

漢字についての考え方として，中心を一つにして円を三つか四つぐらい，一番大きいのから小さいのまで書いてみる。そうすると，一番大きいのは奈良時代以降蓄積されている資源としての漢字ということになって，私は数は分かりませんが，何万とも言われている。これは研究者等がいろいろと研究していくのには非常に役立つし，また，それぞれの専門家がひもとくという点では必要になってくる漢字だろうと思います。これが一番大きくて，その中にちょこっと，3000から4000ぐらいの漢字があって，これが新聞や雑誌で使われている漢字だと思います。これは，表外漢字もあるし，固有名詞に使われている漢字もあるということです。

私は，今の常用漢字の数というのは，前回の時に「国語審議会が始まって最初に作成したのが『常用漢字表』でした。」ということを申したのですが，その資料を家で調べてみたら，今から70年ほど前の資料ですけれども，例えば「学校」の「学」というのは今の略体が使われておりまして，いわゆる正漢字ではないのです。ですから，「学問」の「学」というのは，今，常用漢字でも略体になっているのは，かなり古い国語審議会の答申の結果があるということになると思います。

先ほど松村委員が「漢字は学校で指導することが必要である。」とおっしゃったのですが，「常用漢字」の2000字弱は，小学校から高等学校までの国語科の授業で一度はく

ぐり抜けてきて，習得させる努力を払ったものということで，ここには固有名詞に関係する漢字は，固有名詞だからといって入れているのではなくて，文章表現の上で必要な漢字ということで入っているのです。ただし，使用頻度を見てみると，何百かのところは使われていないものがあるから，これは差し替えないといけないと思っております。

それから，これも先ほど松村委員がおっしゃったのですけれども，1006字，小学校で学ぶべき漢字があります。現在は小学校６年間で1006字の読みを習う。その中の６年生配当漢字に限っては，中学校３年間で書く方に力を注ぐということで，義務教育９年間で1006字の書く力を十分に付けるという形に「学習指導要領」ではなっているわけであります。そうすると，先ほど菊地委員からお話のあった外国人のための日本語教育での漢字ということになると，1006字というところが大切になってくると思うのです。これも見てみますと，ほとんどふだんの文章表現には使わない漢字が入っているわけでありまして，これをどれだけ入れ替えていくかということが問題であります。

七，八年前，文部省から委託を受けて漢字の学年配当を入れ替えたのを調査したことがあります。例えば，「蚕」という漢字を入れ替えたら，出来が大変悪かったんです。「これは養蚕という産業が衰退した結果でしょうか。」と書いたら，これは差し替えということで，産業をもっと振興させなければいけないということがある。そういうことで，学年別漢字配当表も差し替える，常用漢字表も差し替えるけれども，その数は学校教育に頼る数にしないといけない。それ以上の表外漢字や固有名詞の漢字は大事だけれども，一般の言語生活の中で身に付けていただいたら良いと私は希望します。

○　阿刀田分科会長

漢字の問題について，答申をする前に相当入念な綿密な調査が必要なのではないか。その調査に当たっては，現状をよく踏まえ，きめの細かい，これから答申していくことも考えながら，有効な調査をやっていく必要があろうという意見が大変多かったと思います。それから，学校教育との関係についても幾つか指摘されたと考えております。

○　松岡委員

配布資料３の①で例に挙げられている，Ａか，Ｂかどちらか選びなさいというので，Ａの選択肢が「常用漢字表にない漢字であっても，積極的に使っている」という書き方だったら，出てくる答えは違ったかもしれない。ですから，調査をするときには，実態を知る調査なのか，それとも，全体として漢字を使う日本人が，どういう方向に行くのがいいと思っているかを知りたいのか，その辺りをはっきり分けて調査しないと，知るべきことが漏れてしまうのではないかと思うのです。

例えば，常用漢字にしても，読む場合と書く場合，そして，書く場合でも，手書きにする場合とワープロにする場合で，やっていることは変わってくると思うのです。今，私もここでメモを取っていても，頭では交ぜ書き反対，漢字でルビということを思っていても，ここでタタタッと手書きで書いているときは交ぜ書きをしたり，平仮名だけで書いたりしているわけですね。ですから，実態を知るということと，こうすべきというふうな考え方とは分けて調べなくてはいけないのではないかと思います。

それから，人名用漢字にしても，「どういうのがいいと思いますか」というのではなくて，「どう付けましたか」という，付ける親の側からの問いと，「あなたはこういう名前を付けられて，どうですか」という問いですね，そうすると，立場によって，字に対する考え方，それも人名用漢字というのは，非常に私的で個人的な漢字になるわけですから，実態の見え方も違うものが出てくるでしょうし，もう少しくっきりした明瞭な様子がつかめるのではないかと思います。

○　大原委員

私は共通語にルビを振るといった仕事をしているのですけれども，例えば「一昨日」と書いて，「おとつい」とか「おととい」というふうになるのですが，そういう読みはどういうふうになるのか。今，委員の方々のお話を聞いていて，1006字あるけれども，1006字の読み方を入れるとすごい数になるのではないかと思うのと，資料３の③のＱ２で「テレビや新聞のことばづかいで気になる」というのがありますね，この中で「おかしな話し方や流行語の多用」，それから，「変なアクセントやイントネーションというのがとても気になる」というのが出ています。

それから，これも読みになるのですが，「音楽」と書いて，「おんが［濁音］く」と読むのか「おんが［鼻濁音］く」と読むのか。子供の時に，鼻濁音をすごく直されたんです。今は，「鼻濁音はやめてくれ，聞いていてとても気になるから。音楽は「おんが［濁音］く」と言え。」というようなテレビの若いディレクターがいて，そのことをとても怒っていらした俳優さんがいるんですね。そういうふうに読みに関してはどうなのかしらということを思いました。

○　小池委員

この春から大学で教えるようになって，その中に，外国からの留学生がいるものですから，授業のメモをレジュメの形で作って出しているのですが，そこでルビをかなり振るようにしています。それを自分自身でやるのは外国人のためということが一つありますが，それ以前に日本人の学生自体が読めないのではないかと思っているのです。読めないとすると，幾らメッセージを送ってもかなりのところで抜けが出ていおそれがあるなということにある時，気が付きまして，非常に不安になって，これは必要ないかなというものまでルビを振るようになっています。

これは学校関係の方は実感としてお持ちのところで，遅ればせながら，私がこの４月から持ち始めたことだろうと思うのですが，考えてみると，そういう状況でなくても，留学生がこれだけいる，外国人の方で日本で働いている人がたくさんいるという状況の中で，ルビを振るという文化が，表記の仕方，書き方の中にもっと位置付けられていいと思うんですね。ルビを振るという文化が私たちの暮らしの中で定着していないのではないかなというのが一つあります。

例えば，ワープロでルビを振るときも，妙なもので，「書式設定」というところを開いて，「書式」から「ルビ」へ行って非常に面倒くさい手順を踏んでルビを振った瞬間に１行ぱっと開くんですね。１行まではいきませんけれども。そうすると，Ａ４の中に収めようとすると行数があふれるなと思うと，省きたくなるというか，かなりブレーキを掛けるような気持ちになります。ハイテクの世の中にもかかわらずルビを振るということに関しては非常に冷遇されているような気がします。こうした技術的な問題もルビというものが私たちの暮らしの中で一つの文化として定着してくると，ハードのあんばいをする人たちが，もっと単純にルビが振れて，行も飛ばないような方式をすぐにも考えられるのではないかなと思うんですね，これだけいろいろなことができる世の中ですので……。そういうようなことを促していく意味でも，ルビの使用に対して，もう少し前向きな考え方を出してもいいのではないかなと思うのが一つです。

もう一つ，今のことにも関連しますけれども，教育の漢字は別ですが，一般で表記したり実際に書いたりする漢字は，私個人はもう少したくさん使えるようになった方がいいなと思っています。そのときにルビということが出てくるわけです。自分で文章を作るときに，この間，若い人に原稿依頼したら「さすが」というのをやたらに「流石」と書いてくるんですね。それを全部開いて直しましたが，今の若い人は文章化しようとするとやたらに漢字を使うという嫌いがあるんですね。私はできるだけ開くという方向に

努力しているつもりです。たくさん使えた方がいいなと思いながら，それをやたらに使うかというと，そうじゃない方向に自分自身では持っていっているんですね。何が言いたいかと言いますと，表記するときの姿勢と言いましょうか，オーバーに言うと，正書法ということになるかもしれませんが，漢字も含めた表記上の言語生活に対する提言も委員会の中でまとめていってほしいなと個人的には思います。

○　陣内委員

資料２の調査結果について感じたことを述べたいと思います。

３ページ目に「敬語の必要性」という文化庁の「国語に関する世論調査」の調査結果が出ています。こういう結果を見てよく思うのは，敬語の中身ですね，「敬語」という言葉を使って調査をやるわけですけれども，受け取り方は違うのではないかなという気がしています。いわゆる中年以上の世代の思い浮かべる敬語と，若年世代の敬語というのは違いそうだなという気がしていています。この結果を眺めていまして，「必要だと思う」という人がほとんどなので，問題は（２）の理由だと思うんです。先ほど折れ線グラフで説明がありましたように，年配の人たちは相手を尊敬する気持ちが出せるからということで，「尊敬」という言葉に反応していると思うんですね，敬語の中でも尊敬語とか謙譲語というふうな，相手を高めることに対して反応しているのだろう。若い人はむしろ２番目の「けじめを付けることができるから」を選んでいる。「けじめ」というのは一体何だろうか。今の若い世代を見ていて，上下関係というよりは，親疎の関係に非常に敏感になっている。つまり，上下軸が弱まった分，彼らは親疎に配慮するというふうな時代になっていると思うんですね。

だから，「けじめを付ける」というのは，親疎のところで，内の人間かそうじゃないかという，改まりが要るかどうかと，そういうふうなところに反応したのではないかなという気がするんですね。これはまだ推測ですので，分かりませんけれども，「敬語」という言葉を使うときに受け取り方，どういう意味で「敬語」を受け取っているかというのを知るすべがないと，解釈がはっきりしないなということを思っています。

若い世代のことについて一言付け加えて言いますと，私の経験上，先生に対する敬語と先輩に対する敬語とどっちが大事かと聞きますと，先輩の方が大事であると彼らは答えます。むしろ先生に対しては，敬語を使わない方がうらやましがられるという傾向があるんですね。つまり，友達感覚で何でも本音で話せると。ところが，先輩というのは非常に近い存在で，直接関係してくる。クラブの先輩なんていうのは，正にそのような関係だろうと思うんですね。これは敬語の使い方の問題だと思うのですけれども，どういう相手に使うのかということも，我々世代が常識で持っている，「先生は敬語を使われるべきだ」ということではなさそうだというところをきちんと押さえた上で，敬語の問題に向かわなければいけないのではないかなという気がします。

○　前田委員

意識の問題と実際の問題とのギャップと言いますか，そういうことの大きさがあると思うんですね。敬語は必要だと思う場合に，自分が余り使えないから勉強したいという意味もあって，若い学生などは敬語を勉強したい，敬語を使いたいということもあるわけですね。それと同時に，実際に，どの程度使っているのかという調査と合わせて見る必要があるのではないか。使った方がいい，必要だと考えている人がどの程度の敬語を使っているのかということも調べてみると，ギャップが出てくる可能性があって，特に年齢差も出てくるのではないかという感じがします。これは漢字の場合も，名前を付ける場合に難しい漢字を使わない方がいいという傾向が出たとしても，実際に使うときにはどうなのか，使っている場合にはどうなのかということが対比される必要があるわけ

ですね。こういう意味で，意識の問題と実際の使用の問題と，両方合わせて考えていく必要があるだろう。調査については，そういう両面を調べてほしいと思います。

○　岩淵委員

アンケート調査について一言申し上げたいと思います。漢字の場合も敬語の場合も同じだと思いますが，文化庁の「国語に関する世論調査」を拝見しておりまして感じますことは，今，前田委員がおっしゃったことに関連しますけれども，回答者は理想像を答えているのではないだろうかという気がします。

その一番典型的な例が少し古くなりますが，「来れる」がいいのか，「来られる」がいいのかといった調査です。その時には「来られる」という答えが多かったと思います。「見れる」とは事情が違うところがありますが，実際に「来られる」が多いのかというと，そうではなくて，「来れる」ではないかと思います。「国語に関する世論調査」あるいはＮＨＫのものもそうですけれども，アンケート調査をしますと，先ほどどなたかが「いい子になる」という話をなさいましたが，そういう面が出てしまいます。ですから，意識調査ではないアンケート調査の方法を考案する必要があるのではないか，ということを前々から感じております。漢字の方も，先ほどの「さすが/流石」というのはワープロで打ったからそうなったのだろうと思いますが，手書きなのか，ワープロなのかということも考えなければならないのではないかと思います。また読めるのか，読めないのかということも合わせて考えますと，ふだん見慣れているものについての表記が一番いいのでしょうが，めったに見ることのない表記が出てきますと，また，違った答えが出るのではないかと思います。

もう１点申し上げますと，今ワープロ世代というお話でしたが，私のところの学生が「伝える」という「伝」の字の旧字体「傳」を書こうとして，ワープロを使いました時に，「傳」が「伝える」という字であることが分からないままに，マウスでそれらしい字を書いて，違う字，すなわち「傅」に変換してしまいました。本人に「これは何と読むのだ」と聞いてみたのですが，本人はその字（傅）を何と読むのか分からないのですね。引用した文献の字についても読みが分かっていないらしいということも分かりました。今は，漢字を使ってワープロで書くということがいろいろあるようですけれども，読みも意味も分からないままに，漢字を使っていることもありますので，一言申し上げました。

○　坂本委員

先ほどの陣内委員のことと関連するのですけれども，敬語の必要性のアンケートに関してなのですが，私も常々，「敬語が必要と思うか」と言ったときに，「敬語」をどう考えているかというのは非常に疑問に思っていたんですね。先ほど陣内委員ははっきりおっしゃらなかったのですけれども，私もそういうことだと思うのですが，若い人たちは，「です・ます」を敬語だと思っているようなところがあるのではないか。「です・ます」を使うかどうかで，敬語を使うとか使わないといっているような面も確かにあると感じているんですね。それが「けじめ」ということになっているのではないか。それ以上の敬語を使うとなると，アルバイトの接客のところで習うようなものしか使っていないというのが現実ではないかという気がいたします。ですから，敬語の必要性と言うときに，「どんなときにどういう言い方をするのが好ましいか」というふうに具体的に聞かないと，敬語のとらえ方がかなり違う中で，違うことをイメージして答えてしまうのではないかという気がしています。

それから，理由を聞いたときにこの選択肢はどういうふうにして出てきたのかという

ことをお聞きしたかったんです。つまり，相手を尊敬する気持ちを表せるからというのは，確かに尊敬ということで選ぶ人も多い反面，「尊敬」という言葉が入っているから余り選びたくないということもあるかもしれない。この選択肢の受け止め方で違ってくる面もあるような気がいたしますので，その辺の，意識の上での実態調査も必要かなという気がしています。

それから，漢字のことで一つだけ申し上げたいことがあるんです。私も外国人に対する日本語教育にかかわっておりますが，そういう中で漢字を教えている先生などが漢字の使い分けですね，たまたま今日そんな話が出てきたのですが，「まぜる」という字を「混」で書くか，「交」で書くかという使い分けの問題を教えるのに，辞書によっても違うし，自分はこう思うけれども，問題集にはこう書いてあるということで，ちょっと話題になったんですね。ワープロを使うようになると，どの漢字を使うかということが重要になってきますので，漢字の問題を考えるときには，そういうことも考えていただきたいということを個人的に思っております。

○　杉戸委員

先ほどの陣内委員と今の御意見に関係することですが，文化庁の「国語に関する世論調査」の中の敬語の質問の中に具体的に敬語を含んでいる文を出して，「この中のどれが敬語だと思いますか」という質問でしたか，あるいは「この中に敬語があると思いますか」という質問でしたか，やっていらっしゃいましたね。今のお二人の御意見はその項目と，今日の配布資料の「必要だと思う」とか，「尊敬する気持ちを表せるから」，「けじめがはっきりさせられるから」，あるいは「やわらかく表現できるから」，そういう選択肢を選んだ人と，何を敬語と思っているかという項目とを，二つ重ね合わせて集計することで，情報が増えると思うのです。

国語研究所でも，「です」とか「ます」を敬語だと思わない人がどんどん増えているというデータがあるわけですが，この「国語に関する世論調査」でも，そういう傾向があると伺ったことがあります。そういう中で，今日，紹介された敬語の必要性，あるいは必要だと思う理由，その回答者が何が敬語だと思っているかということが非常に深い関係にあると思うわけです。これは，お二人と同じ意見ですが，そのデータは既にあると思います。ただし，それは報告書を見せてもらうだけでは分からない。元のデータに戻ってクロス集計をやらないといけないわけで，それを是非お願いしたいと思います。

○　阿刀田分科会長

アンケートをどう読み切るかというのは本当に難しい問題だと思います。また，設問の仕方そのものから問わねばならない問題もあるんだなということをしみじみ感じさせられております。